

## 校章・校歌の由来

### 〈校章の由来〉

江戸川大学の校章は、昭和 60 年 4 月に江戸川女子短期大学の開学にあたり当時の江戸川学園第 2 代理理事長木内英夫先生と、イデア工房の山田健男先生の考案によって生み出された。

校章の四本の波線は豊かに流れる江戸川の流れの象徴であり、また、波の区切りは本をあらわし学問の府の象徴である。さらに立体的に見ると、波が段になっている。これは知・情・意・体の調和のとれた全人教育を象徴したものであり、その波の形が最後に跳ね上がっているのは、未来永劫に飛躍を続けていく人材を養成する学校であるという象徴である。

こうした多くの期待と願いをこめて、両先生がこの世に江戸川女子短期大学の校章を誕生させたのであるが、平成 2 年 4 月、江戸川大学を開学するにあたり、同じ駒木のキャンパスでもあり大学にかける思いも同じ、ということから同じ校章を用いることとなった。

### 〈校歌の由来〉

一番の特徴は、万葉集の歌をモチーフにしているところである。古来、駒木の里は、葛飾野と呼び慣わされ、関東平野の穀倉地帯であった。

この地方を詠んだ歌に、

『<sup>にほどり</sup>鳩鳥の<sup>にへ</sup>葛飾早稲を<sup>か</sup>饗<sup>な</sup>すともその<sup>あ</sup>愛<sup>し</sup>きを<sup>と</sup>外<sup>に</sup>にたてめやも 卷 14-3386 作者未詳』

《豊饒なこの葛飾の地に実った早稲米を今日は神にお供えして感謝する新嘗の儀式の日である。この大役を仰せつかった私は、身も心も清く潔斎しておかなければならない。だから、今日は愛しいあの人と会うことはできずに、外であの人をずっと待たせておくのがつらいのです。》

という歌がある。公的な仕事をしなければならない自分の立場とそれにも増して募る思いに苦しむ乙女の姿が見える秀歌である。

鳩鳥（カイツブリ）が群れ飛ぶ田圃は、その実りを神に感謝する豊穰の地であったのである。それゆえ鳩鳥は葛飾の地の枕詞として定着した。

この校歌一番に示されたメッセージは、自分の内なる思いを失わずに大切に持ち続けることが、生きる証であり、美しさにつながるのだ、とする純粋で素朴な感情への憧憬である。そのたくましい生き様に江戸川の「輝き」「溢れる」光景に重ね、「すこやかな」という形容動詞によって修飾する。

二番の特徴は、古今集をモチーフにしているところである。古今集の歌には桜の花の燃え盛る色、豊かな香り、散る哀れなどを詠んだ歌が非常に多い。古今集の仮名序で、神の時代から人の時代になって「花をめで」、「鳥をうらやみ」、「霞をあはれび」、「露をかなしぶ」心が歌となってあらわれた、と紀貫之は主張する。その思いの一番目にある花こそが桜なのだ。ゆえに「四季の花」にはもともと「桜」を入れる予定であった、と作詞者は語っているが、その優美な世界を「四季の花匂ふ盛りに」と捉えて、キャンパスに集い会い青春を過ごす学生を重ねたのである。

ここに示されたメッセージは、幾時代の時間の流れにも失われることなく息づいている先人の創造した文化や美を手本にしてほしいという思いである。時代を超えて思いを馳せ、ひとりよがりになることなく、先人の「輝き」を「はるか」に理解しようとする「うるわしき」「しなやかさ」を持ち続けなければならない、としている。

人の世となりて すさのをの命よりぞ 三十文字あまり一文字はよみける すさのをの命は 天照大神のこのかみなり 女と住みたまはむとて 出雲の国に宮造りしたまふ時に そのところに八色の雲の立つを見て よみたまへるなり  
や雲立つ出雲八重垣妻ごめに八重垣作るその八重垣を かくてぞ花をめ 鳥をうらやみ 霞をあはれび 露をかなしぶ心 言葉多く 様々になりける  
「古今集」仮名序の一節

三番の特徴は、新古今集をモチーフにしているところである。過去を見つめ学ぶ姿勢（二番）が学問の完成形ではない。過去から学んだ後に未来に向かって、自らが創造して行かなければならない、と。「輝くは」「ゆたかな未来」として視点を未来に向けている。しかし「いにしへを 今に学びて」と伝統を土台にしなければ未来は構築できない、としている。つまり過去からの伝統に新しい創造の未来を連結

することが学問の最終形であると示しているのである。言い換えれば建学の精神を学園生活に生かし、互いに切磋琢磨し学問に励もうと呼びかけているのである。

#### 【まとめ】

素朴な自分の感性を決して忘れてはならない。

先人の創造した文化から謙虚に学ばなければならない。

先人の創った伝統を踏まえ、自らの創造をもって未来に繋がらなければならない。

#### 【メロディー】

江戸川大学の風景を江戸川の流に象徴すべく、八分の六拍子というリズムにした。

「1 2 3、1 2 3、1 2 3、」というリズムでは忙しなく、小川の流をイメージしてしまう。それに対して「1 2 3 4 5 6、1 2 3 4 5 6、1 2 3 4 5 6、」というリズムになれば川の大きさを象徴できると考えた、と伝えられる。

#### 〈校歌の歴史〉

こうした意味を持った校歌は昭和60年4月、江戸川女子短期大学の開学にあたり作詞は國學院大学教授で文学博士の阿部正路先生に、作曲は相模女子大学の山田光生先生にお願いした。全体的になめらかな曲であるが、なめらかな中に厳しさを、厳しさの中にも平遠の美を、という思いを胸に秘めて作曲されたという。

この校歌も平成2年4月、江戸川大学を開学するにあたり、校章と同じく同じ校歌にしようということになり、もともと女子学生向けに作られた詞の一部とゆるやかな曲を、男女両方にふさわしい少しテンポの良いものにと、詞は阿部正路先生によって一部変更を、作曲はNHKの「みんなのうた」の編曲を手がけた小野崎孝輔先生にお願いして出来上がったのが現在の校歌である。

その後同じ駒木キャンパスに位置する江戸川学園豊四季専門学校（現・江戸川大学総合福祉専門学校）もこれを校歌と定めた。

もとの江戸川女子短期大学の校歌はつぎのとおりである。

#### 江戸川女子短期大学校歌

作詞 阿部 正路

作曲 山田 光生

江戸川の流ののかなた  
輝くは溢れるいのち  
にほだりの葛飾の早稲  
緑なす風にのびゆく  
すこやかな阿あ江戸川の学園われら

富士筑波そびゆるかなた  
輝くははるかなる空  
四季の花匂ふ盛りに  
集ひあふここにをとめは  
うるはしき阿あ江戸川の学園われら

駒木原広がるかなた  
輝くはゆたかな未来  
いにしへを今に学びて  
ひたすらに励ましあはむ  
きよらかな阿あ江戸川の学園われら

文責 副学長 下平 武治

メディアコミュニケーション学部マス・コミュニケーション学科長 佐藤 毅